



元気にマシメに笑顔をつなぐ

あゆみだより

2020年11月吉日発行

No.215

一段と日が暮れるのが早くなり、毎晩の冷え込みが晩秋の訪れを感じさせるようになりました。

新型コロナウイルスの影響により何かと不便の多い昨今です。あゆみの家最大のイベントである「あゆみ祭」も中止となってしまいました…が!そんな日常の中でも、各グループが創意工夫を凝らし様々な取り組みを行っています。

「with コロナ」を合言葉に、今後とも皆様のご理解とご協力をよろしくお願い致します。



館内換気放送



新型コロナウイルス感染症対策の一環として所内換気を行っています。

午後の換気放送は、利用者が交代で担当しています。

緊張してしまう方や堂々と大きな声でアナウンスをする方、また耳元で職員が歌を唄い盛り上げるなど、各グループ工夫を凝らした放送です。

「今日の換気放送が楽しみだね!」「誰が担当かな?」など、あゆみの家全体で換気の時間が有意義なものになっています。



本号の内容

館内換気放送	1P
アロハフェス、大運動会	2P~3P
ICT担当の取り組み	4P~6P
障害者の家族と本人、支援者のこと	7P~8P

今年度は所外への外出もままならず、何か所内でできる楽しいことはないものかと思いを巡らせました。

そこで初夏の季節にピッタリのハワイアンショーをやってみようというアイデアがでて、とんとん拍子に計画が進み6月に2日間を使って、「アロハフェス」と銘打った音楽ショーを企画しました。

新型コロナウイルス感染防止の為、各グループは午前部の部と午後部の部に分けて多目的ホールに招待し、ワンステージは15分以内のプログラムと決めました。当日は、お花紙で作ったカラフルなレイやアロハシャツを身に着けたリゾート気分で、ウクレレの軽やかな音色にあわせて「月の夜は」や「ハメハメハ大王」等の曲でフラダンスを踊って楽しみました。



イベントその2 7月 サンバ 31大運動会



風薫る季節に、利用者の方が「運動会」とつぶやきました。そんな季節ですね、競う事や応援するって楽しいですよ、と思案してそれならば「サンバ大運動会」をオリンピックの開催予定であった7月に行なってみようと思いがまとまりました。そこからどのような競技種目が良いか連日考え、大小様々な大きさの箱をバランス良く積み上げて時間を競う、「つむつむ」というあゆみの家公式種目が完成しました。開催当日は厳かに選手宣誓を館内放送で行い、聖火ランナーが所内を回って開会を伝えました。新型コロナウイルス感染対策のため競技は各グループ個別に行い、その様子はオンラインで別室スクリーンに映し出され皆で応援しました。5グループが競った結果、優勝はサンバ31グループでした。また、個人種目の投てき競技で記録を出された方たちもメダルを授与されました。



ICT 担当の取り組み

はじめに

2020年4月より、施設の改修工事も終え、グループも一つ増え、気持ちも新たに「5グループ制」となった新生あゆみの家が始動開始しました。そして、昨年度から「生活支援」以外の職員の役割に、「ICT（※1）担当」という新たなものが加わりました。近年、特別支援学校でも iPad（※2）が1人1台支給されたり、ノートパソコンと視線入力装置を使った授業が行われる時代になっており、卒業後に過ごすあゆみの家でも ICT 支援の継続性を保つ為に出来た役割担当です。

立ちはだかる壁・壁・壁...

まずは前年度から職員が IT 研修に出向いたり、各グループの利用者から数名モニターを募って取り組んだりと準備は進めてきたものの、ちょっとしたことが困惑の種となり、「言うは易し行うは難し」を痛感する毎日でした。

例えば、筋緊張や不随意運動で常に身体が揺れる上に、眼振や斜視などがある利用者にとって視線入力装置をマッチングしていけばいいのか？数ある機材やアプリのどれを選ぶのが利用者のためなのか？そもそもパソコンの画面に「興味」をもってもらうにはどうしたら？？などなど、次から次に壁が立ちはだかりました。最も高かった壁は、日中支援が終わってからの限られた時間内でアプリの使い方を勉強したり機材や補助具の研究をするにも、なかなか思うように事が進まなかったことです。

突然の3回大禍で...

ところが、コロナ禍の為に様々な行事やイベントが軒並み中止になったために、「ICT にかける時間」と「ICT の必要性」が同時に転がり込んで来ました。ある意味「有り余る日常生活」の中で、職員の余裕も考える時間も増え、外出も集合行事も出来ないため ICT 機器を使用した日中の個別支援活動が増え、密を避けるための「オンライン」のニーズが増え、日々現場レベルで具体的な実践が積み重なり、ICT があっという間に日常化、習慣化していくこととなりました！



iPadと視線入力で楽しめる!

現在、具体的に取り組んでいる ICT 活動をご紹介します。まず iPad を用いた個別支援の取り組みです。好きな YouTube での動画鑑賞を自分自身で操作して楽しんだり、「ドロップトーク」という絵カードアプリを使って活動内容の選択を行う利用者もいます。ある利用者は「漢字学習アプリ」で着々と読める漢字を増やしています。ゲーム感覚で覚えられるのでとても楽しいようです。iPad のゲームアプリはシンプルに楽しめるものも多く、パンケーキをフライパンで焼いて重ねたりする「お料理ゲーム」にハマって、一生懸命手を動かしている利用者もいます。現在あゆみには 2 台の iPad がありますが、近々 3 台追加されて各グループに 1 台ずつ行き渡る予定なので、さらに活用の幅と自由度が広がるでしょう。



次に、「視線入力装置」のご紹介です。パソコンを操作する為には、通常「マウス」を手で動かす必要がありますが、トビー社の「Tobii Eyetracker 4C」という細長い装置をモニターの下部に取りつけると、画面を見つめる人物の「目」を検知し、視線を動かすだけでパソコンを操作することができます。あゆみの家では「EyeMot」という重度障害者の為に作られた無料の視線入力ソフト(※3)を使っています。「風船割り」や「塗り絵」ゲームを楽しむ人や、視線を画面上で自由に走らせると、音や光が視線に伴って縦横無尽に現れるゲームに夢中になっている人もいます。今後は、重度の肢体不自由の利用者の意思表示に役立てるように、視線入力のフィッティングをさらに追求していく予定です。「東京都障害者 IT 地域センター(※4)」の HP を見ていただくと ICT を利用した利用者支援の様々な実例が参照できます。

zoomとマチコミ…支援以外にも広がるICT

また、「利用者支援」以外でもコロナ禍を乗り切るべく、二つの点で ICT 化を進めました。まず一つ目は、zoom(※5)を使ったオンラインミーティングです。多くの企業でテレワークが進み、テレビをつけても zoom 画面を目にしなれない日はないといった有様ですが、あゆみの家でも「多目的ルーム」と「会議室」という 2 部屋を繋いだ zoom による職員研修を 7 月に行いました。

二つ目は、保護者と施設を繋ぐメーリングリスト「マチコミ(※6)」を 8 月から導入したことです。

関東地方でもいくつかの福祉施設で陽性者が出て、数日間施設が閉鎖される事態が起こっています。施設の突発的な休所など万が一の緊急時の際にも、今までなら地道に保護者の電話連絡網に頼るしかありませんでしたが、マチコミを導入することで施設からの一斉連絡が可能となり、大事な情報を瞬時に、正確にメールやアプリで確認していただけるようになりました。

おわりに

利用者さんに一段階新しい生活を提供する仲立ちをすべく、様々な壁(?)を乗り越え、ICT担当は今後も様々な企画(妄想?)に取り組んでいきます。皆さまからも何か新しい情報や便利なアイデア等あれば、是非ICT担当までご一報ください。

- (※1) 利用「Information and Communication Technology (情報通信技術)」の略。通信技術を活用したコミュニケーションのこと。
- (※2) アップル社から販売されているタブレット型コンピューター
- (※3) 島根大学 伊藤文人先生が主催する「ポランの広場 <https://www.poran.net>」に詳しい情報あり。
- (※4) 障害当事者や支援者の為の IT 相談や研修を行う東京都福祉保健局の管轄事業。茗荷谷の社会福祉保健医療研修センター1階にショールームがある。www.tokyo-itcenter.com
- (※5) パソコンやスマートフォンを使って、セミナーやミーティングをオンラインで開催するために開発されたアプリ。
- (※6) 主に学校などの教育機関向けに、従来の電話やアナログな方法による連絡の不便さを解消する為にスタートしたメール連絡網サービス。

障害者の家族と本人、 支援者のこと

新宿区立障害者福祉センター館長
矢沢 正春（前あゆみの家所長）

～あゆみだより214号の坂野さんの
講演記録7Pからの続きです～

ひとり暮らしは許さない！

平成3年に新宿区で初めて誕生した重度障害者向けのグループホーム「トークハイム」に空きができて私に声がかかりました。初めは迷いましたが、自分の悩みを色々な人に話すことを通じて不安が徐々に解消していった「自立生活に挑戦しよう」と決心しました。しかし、そこに立ち上がったのが親という大きな壁でした。

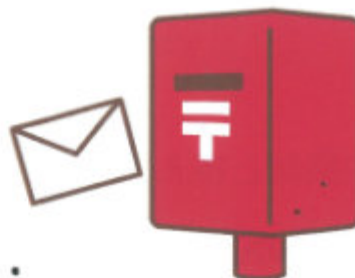
両親に自分の気持ちを伝えたところ、一言「ダメだ!」と言われました。でも、私としては、何としても入居したい。1人で親と戦うことは厳しかったですが、体験室の職員や障害者の仲間がいたことで助けられて、何度も何度も親に立ち向かって説得を続けました。その都度、「お前には無理に決まってる。

入居してもすぐに戻ることになるんだから…」と言われ続けましたが、最後は私の粘り勝ちのようになって、渋々承諾してくれました。

＊しかし、条件付きでした。条件とは銀行の通帳は渡さないということでした。「現

金の管理をする能力がない」と思われていたんでしょうね。でも、そんな生活は「自立生活」ではないと思ったので、体験室の職員や仲間に相談して、エクセルで出納帳の表をつくり、領収書はスクラップファイルに貼ることにして、その作業を毎日続けていきました。ある程度、職員にも認められるようになった段階で親に手紙を書きました。何故、直接話さないで手紙にしたのか、そこは職員のアドバイスがあったからです。当時の私と親の関係は最悪でした。特に私の方が悪かったのですが、親と顔を合わせても一切話をしませんでした。顔を合わせたくない思いもありました。

その様子を見て、今は直接の対話よりも手紙がいいのでは?ということで手紙を勧めてくれたのだと思います。手紙には近況と自立への思いを書きました。何度も書き直して1年間くらい続き、手紙は7通になりました。



しかし、親から通帳を渡してもらえそうな気配はありませんでした。私は、ひとつの結論を出しました。私は親と直接対決することが怖くて(負けるのが怖くて…)対決するのを避けて、仲間や職員に助けてもらいながら回りくどい作戦を続けていましたが、最終的には自分の言葉で伝えないとダメだ、と思いました。職員に決意を話すと「自分で決めたのだから、がんばって!」と言われました。さっそく実家に戻って話そうとしましたが、喉元までは言葉が出てきましたが、声を出すことができないまま、その日はホームに戻りました。落胆してホームに戻ると担当ペアの職員が「別にいいじゃないですか。次の時に伝えられれば…」と言ってくれて、それが次の行動の原動力になりました。

2回目、実家に戻り、ついに親に「今日まで自分でお金の出し入れの管理をしてきた。通帳の管理も自分でできるから渡して欲しい!」と伝えると、「その言葉を待っていたんだよ」と言って通帳を手渡ししてくれました。

その喜びを担当ペアの職員に伝えると「良かったね〜!」と一緒に喜びました。

障害者の家族と本人

親は「我が子のことは何でも知っている、

誰よりもわかっている。最後まで守ってあげる」と言うことでどんなことでもやってくれます。自分で言えない、できない本人のために先回りして何でもやってくれます。

でも、支援者や職員は、親ではない。支援者は先回りしてはならない存在だと私は思います。

…と、ここまで紹介したら、もう紙面がありません。支援者と親の違いについて、坂野さんはもう少し書いています。私が坂野さんと初めて出会ったのもこの頃のことです。当時は、週末に時々ボランティアとしてセンターに出入りしていました。センターの館長として関わっている今も、坂野さんから何かと教わるがありますが、あゆみの家の所長の頃にこの文章に触れて、あゆみの利用者と職員の場合は、どうなんだろうと考えました。

次号でその話も触れることにします。

